土屋健治
『カルティニの風景』

めこん，1991

インドネシア・ナショナリズム研究としての『カルティニの風景』

土屋健治はその研究者人生をインドネシア民族意識の成り立ちを描き出すことに捧げた。土屋のインドネシア・ナショナリズム研究の根底には，ジャワ文化に対する研ぎ澄まされた感受性と深い洞察があった。

土屋の研究には二つの流れがある。一つは思想史研究である。『インドネシア―思想の系譜』（土屋 1994）に収録された初期のスカルノ（Sukarno）論や，キ・ハジャル・デワントロ（Ki Hadjar Dewantara）とスカルノの思想を通底するジャワ文化の概念を探った『インドネシア民族主義研究』（土屋 1982）はその代表的な成果である。もう一つは文化史・社会史研究である。19 世紀のオランダ・ジャワ学とロンゴワルシト（R. Ng. Ranggawarsita）との関係性を解き明かした「19 世紀ジャワ文化論序説」（土屋 1984）や，ジャワを中心にインドネシアのフロンティア空間の成立を論じた「インド

ネシアの社会統合」（土屋 1988）などの作品群がここに属する。

19 世紀後半から 20 世紀初頭のジャワに生きた女性カルティニ（R. A. Kartini）の心象を探る『カルティニの風景』は，主に後者の流れを汲みつつ，それを前者の流れに繋ぐ作品だといえる。本書で土屋が試みるのは，カルティニを起点として民族と祖国の「風景」の成立とその後の展開を辿りつつ，インドネシアの人々の精神の軌跡を描くことである。

カルティニの生涯

カルティニは 1879 年に中部ジャワ北岸のジュパラに生まれた。父は貴族の家系で郡長や県知事を務めた。生母は父の側室だった。当時のジャワ人女子としては例外的にヨーロッパ人小学校に通い，オランダ語を修得した。しかし，13 歳の時にジャワ貴族の慣習に従って婚前閉居に入り，学校もやめて知事公邸内で一日中を過ごすことになった。

「牢獄に閉じ込められたような」生活でカルティニと世界を繋いだのがオランダ語の書物であり，読書を通じて彼女は「内面の旅」を続けた。1898 年に婚前閉居を終えたカルティニは，翌年にオランダ語雑誌でペンパルを募集し，オランダ人たちとの文通を始めた。その後，オランダ留学断念などの挫折を経て，女性の地位向上活動などに尽力した。1903 年に父が薦める県知事の男性と結婚し，翌年に出産後の産褥熱で 25 年の短い生涯を閉じた。

カルティニが文通相手に送った多数の手紙は，植民地政府教育文化省長官を務めたアベンダノン（J. H. Abendanon）とその妻（夫妻ともにペンパルだった）の編集を経て，1911 年に『暗黒を超えて光明へ』という書簡集として刊行され，反響を呼んだ。カルティニと文通したオランダ人には，当時の最先端の思想や運動に関わっていた知識人が含まれていた。

近代的個の成立と「風景」の誕生

土屋はカルティニの民族意識の形成の契機として，「風景」の発見という現象に注目する。ワヤン劇にみられるようなジャワの伝統文化では，自然はあくまで伝統的な「決まり文句」（クリシェ）として語られる。それに対して，カルティニの書簡集では，「自然は自然それ自体として，あたかも風景画を描くように描かれる」（p.84）。

風景画を描くように自然を描写することを可能にしたのは，「わたし」（Ik）というオランダ語の主語を獲得したことである。「つまりカルティニは，「わたし」（Ik）というオランダ語を手にすることによって，あたかも画家がキャンバスの上に風景を描くように，自然を描写しているのである。これは，主語を強調しない，それどころかしばしば無人称で状況が描かれるジャワ語やインドネシア語と比べて大きなちがいである」（p.84）。カルティニはオランダ語で書物を読み，文章を綴ることで，「近代的個」としての主体性や内面性を獲得するとともに，自然を「風景」として対象化するようになったのである。

カルティニは手紙の中で風景を「美辞麗句」と「決まり文句」――ワヤン劇で語られる伝統的なクリシェとは異なる写実的なクリシェ――の連なりとして描いた。それによって，カルティニの描く風景は特定の場所や集団に所属しない，誰もが共有できる「ノスタルジアの心象風景」（p.108）として示された。

カルティニが生きた19世紀後半以降の植民地都市では，異文化の混淆を通じて「メスティソ的文化現象」が生まれた。ヨーロッパ人，ユーラシアン，華人，原住民などが文化的に混じりあい，新しい様式の風景画やクロンチョン音楽のような，通俗的で定型化され，特定の地域や集団に帰属しない大衆文化が誕生した。新しい様式の風景画は，「うるわしの東インド」の風景画と総称され，熱気や湿気に満ちた現実とは遮断された「ガラス越しに見られた消毒済みの風景」（p.116）が描かれた。

カルティニの書簡で描写された「ジャワの風景」は，「うるわしの東インド」の風景画と同じように，クリシェに満ちた共有可能な心象だった。土屋によれば，「カルティニは「メスティソ的文化状況」を言語化したという限りにおいて，19 世紀末のジャワ社会のすぐれた語り部であり，オランダ語を性能の良いレンズと化してジャワ社会を対象化したという限りにおいて，ジャワ思想史上最初に現れた「近代的個」であり，風景を文化的に規定するという営為を自覚的に示したことにおいて，民族意識の先駆者であった」（p.144）。

「風景」の変遷と「うるわしのインドネシア」の確立

20 世紀に入り，オランダは啓蒙的「倫理政策」を導入した。カルティニはオランダの近代的啓蒙主義により〈ヤミ〉から〈ヒカリ〉に達した「近代精神の先駆者」としてオランダ人の賞賛を受けた。他方，インドネシア人ナショナリストや独立後のインドネシア国家はカルティニを「民族覚醒の先駆者」として称えた。1964 年には政府によって「国家独立英雄」の称号を与えられ，4 月 21 日の生誕日は「カルティニの日」として祝われている。

「メスティソ的文化現象」は 20 世紀以降に新たな性格を帯びるようになった。クロンチョン音楽は，作り手や聞き手が主にインドネシア人によって占められるようになり，インドネシアの「国民歌謡」と化していった。「うるわしの東インド」の風景画も画家と顧客がインドネシア人中心となり，「うるわしのインドネシア」の風景画へと変化していった。

1991 年現在の「国家の風景」にみられるのは，市場経済や国家の政策を通じた「うるわしのインドネシア」の氾濫である。「うるわしのインドネシア」のイメージは商品，学校教育，観光，博物館・記念碑・英雄墓地などを通じて社会の各層に行き渡った。カルティニを起源とする「うるわしのインドネシア」は，「国民国家の至高性と永遠性を証する心象風景と

なった」（p.258）。しかし，「うるわしのインドネシア」と繋がりつつも別の方向に向かう力も存在する。例えば，かなしみにとざされた風景を歌った歌手エビート（Ebiet G. Ade）である。彼のように，カルティニと同じく「いま目にしている時代の風景を描き上げる人々」（p.268）が今後も誕生する可能性を示唆して，土屋は「風景」をめぐる旅を終える。

研究対象をどう書くか

土屋は本書の「あとがき」の部分で，本書の構想から執筆の開始までに時間を要した理由の一つとして，「カルティニについてどういう書き方をしたよいのかを決めかねていた」（p.272）ことを明かしたうえで，以下のように述懐している。

> そして，私にとってのインドネシアを，「私」という主語を用いて書こう，それが当面「カルティニの風景」について記すもっとも自然な方法ではあるまいか，そう決めた時に，ようやく最初の一行を書き始めることができた。（p.272）

土屋が「私」という主語を用いて書くことにはどのような意味があるのか。まず，「私」という主語を用いることで，土屋は「カルティニの風景」というテーマを着想するに至った個人的な契機を語ることができるようになった。「風景の中へ」と題する最初の章で，土屋はインドネシア留学時の体験に触れ，当時の下宿の応接室に飾られていた 2 枚の絵，とりわけ湖と山が描かれた風景画が本書の問題意識の発端だったことを明かしている。

しかし，より重要なのは，「私」という主語を用いることで，土屋がカルティニのまなざしに近づけたことだろう。「わたし」（Ik）という視点から映し出されたカルティニの心象風景に迫るために，土屋自身もまた「私」という主語を必要としていたのではないか。

「私」という主語を得た土屋は，「土屋健治の風景」とでもいうべき印象的な風景の描写を通じて，読者を本書の舞台であるジャワへと誘い出す。以下の一節は好例だろう。

> 昼は限なく明るい日差しがまっすぐに降り注ぐが，夜は深く濃い闇に満たされる。昼は光の粒子，夜は闇の粒子が天上から降り注いで空間をあまねく満たしている。そして，このようなジャワの気配は，夜の訪れとともにことさら緊密に立ち昇ってくる。（p.23）

「土屋健治の風景」を下地として「カルティニの風景」が語られることで，読者もジャワにおける「風景」の誕生をより身近な感覚で追体験できる。これは本書の魅力の一つである。

しかし，こうした書き方は，「カルティニの風景」が「土屋健治の風景」の中に包摂されてしまう危険性も秘めている。「カルティニは土屋の描いたナショナリズム誕生の風景の一部と化した」（小林 2018: 61）のだとすれば，民族誕生の物語に収まりきらないカルティニのほかの側面が見落とされるおそれもある。そうした問題意識から，土屋の研究に触発されつつも，「民族覚醒の先駆者」に回収されない新たなカルティニ像を模索する試みもなされている（富永 2019）。

土屋が「私」という主語を用いて書いたことの当否をここで問うつもりはない。むしろ，より重要なのは，土屋が「私」という主語を用いて書こうと決めるまで，長い時間をかけて考えと思いを巡らせたことである。研究対象にどう向き合い，研究対象をどう書くかを徹底的に考え抜くこの真摯な姿勢にこそ，土屋の地域研究者としての真髄があるように思える。土屋の作品がひとの心を打つ理由の一つはここにあるのではないだろうか。

参考・関連文献

小林寧子．2018．「国家・英雄・ジェンダー―カルティニ像の変遷」『歴史の生成―叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』小泉順子（編）．京都大学学術出版会．

白石隆．1996．「インドネシアの近代における『わたし』―カルティニの ik とスワルディの saya」『東南アジア研究』34（1）．

土屋健治．1982．『インドネシア民族主義研究―タマン・シスワの成立と展開』創文社．

――．1984．「19 世紀ジャワ文化論序説―ジャワ学とロンゴワルシトの時代」『東南アジアの政治と文化』土屋健治・白石隆（編）．東京大学出版会．

――．1988．「インドネシアの社会統合―フロンティア空間についての覚え書き」『アジアにおける国民統合―歴史・文化・国際関係』平野健一郎ほか．東京大学出版会．

――．1994．『インドネシア―思想の系譜』勁草書房．

富永泰代．2019．『小さな学校―カルティニによるオランダ語書簡集研究』京都大学学術出版会．

ベネディクト・アンダーソン．白石隆・白石さや（訳）．2007．『定本　想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山．（原著：Benedict Anderson. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Edition. London and New York: Verso.）

❖本書の著者紹介（土屋健治）

元京都大学東南アジア研究センター教授。東南アジア思想史論，インドネシア地域研究。本書以外のおもな著作に『インドネシア民族主義研究―タマン・シスワの成立と展開』，『インドネシア―思想の系譜』など。

❖執筆者紹介（左右田直規）

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。専門はマレーシア政治社会史。個人的に感銘を受けた本を一冊挙げるとすれば，阿部謹也．2007．『自分のなかに歴史をよむ』（ちくま文庫）筑摩書房。研究とは何か，異文化や過去を学ぶ意味は何なのかを根源的に考えさせてくれる著作。もともとは 10 代の若者向けに書かれた本だが，何歳になって読んでも味わい深い。